

鼠族驅除と家屋改造

醫學博士 井上豊太郎

西洋の文明國にペストが無いと云ふのは、全く家屋の構造が善く出来て居る爲めに鼠が繁殖する餘地が無いのに因るのであらうと思はれる、それでも併し往々外國より輸入した古綿其他の物の厄介に依て一時ペストの流行したと云ふ例もあるけれども、元來日本のやうに鼠族が隣家から隣家を飛歩くと云ふ程の餘地が無い爲めに、忽ち其流行が止まるのみならず其病根も絶滅して了ふと云ふ譯である。之に反して我邦の如き家屋の構造であつては、一朝ペストが這入つて來ると却々之を退治することは困難である。成る程日本の家屋の構造と云ふものは日本の温度に適した構造ではあるが。西洋の家屋建築法を其儘日本に輸入することは不適當かも知れぬから、同じ西洋館の型は採つても日本の建築者の考で日本の温度に適するやう

な構造にするだらうと思はれる。勿論建築の事は専門家の意見に任せて宜いけれども、唯だ吾々は日本の家屋もどうか一つ全家屋を隅から隅まで鼠の自由に往來の出来ぬやうにしたいものだと思へて居る。鼠と云ふものは一定の住居があると云ふ譯では無い、隣家から隣家と飛歩いて食物を見つけてはそれを喰ひ、そうして匿れ場所として多くは床下或は天井の裏わたりに晝は蟄伏して居つて夜になると跋扈し始めるものである。日本の從來の家屋の構造は實に彼が跋扈する餘地が充分に在る即ち壁と俗に壁板と云ふものとの間隔があるもので、彼れが床下と天井との間を上り下りが充分に出來る、そこで今の日本の家屋では到底鼠が防ぎ切れぬから、どうしても西洋家屋でなければならぬと言ふならば、それは我が日本の今日の民力の程度並に日本の氣候と云ふ點からして出來ない相談であるけれども、併し鼠の體軀と云ふものは風や塵埃に附着して何處にでも這入り込む微菌の如

き小なるものでは無い、二十鼠と言つた所が種
 々な昆蟲類に比較の出来ぬ程大きいものであるか
 ら、彼等が自由に往來が出来ぬやうにすることは
 容易い話だらうと思ふ。今日は鐵葉細工も随分發
 達して居るのであるから、鐵葉を以て鼠の往來す
 る壁と壁板の間の口を塞ぐとか、或は更に進んで
 壁を兩面とも塗つて了ふ、日本の新普請は多く壁
 の片面だけを塗上げて壁板を打つ方は塗らずに出
 來て居る、それで鼠族が自由自在に其間で跋扈が
 出来る譯であるから、土を惜まず手間を掛けて上
 の梁の處までズツと兩面とも塗上げることにした
 ならば彼れが辛うじて一室の天井に侵入すること
 が出來ても、今日の如くまた他室に向つて跋扈す
 ると云ふ事は困難であると思ふ。それから又鼠と
 云ふものは明るい處は遠慮して夜跋扈する位の奴
 だから、晝でも暗い處であると随分騒廻るから暗
 い處には硝子を張つて光線を取つて明るくして置
 いたならば、今日の如く鼠の跋扈が甚だしくない

だらうと思ふ。現在の家屋を見ると一間位の間隔
 に丸石を敷いて、それに根太を渡して、其上に柱
 を建てるに云ふやうな風になつて居つて、鼠が床
 下に自由に這入ることが出来るやうに造つてある
 が、此頃では房州石とか云ふて廉價な石もあるの
 だから、さう云ふ切石でもズツと根太の下に敷詰
 めて置いたならば彼等も這入り悪くいだらうと思
 ふ、勿論牀下の空氣の流通を害すると云ふことは
 宜しくないから、所々に窓を附けて其處に網を張
 つて空氣の流通を圖ることは必要だが、兎も角も
 是からの建築に付ては牀下にも鼠族が這入り得ら
 れぬやうに改良しなければ、到底鼠の驅除と云ふ
 ことは六ヶ敷からうと考へる、殊に最も注意を要
 する場所は炊事場である、彼等は自分の匿れ場所
 として人家に這入り込むものであるが、如何に彼
 等と雖も食物無しに永く人家に居ると云ふ譯には
 行かない、それで夜人の寢静まる所を窺つては炊
 事場を襲撃する、炊事場に行つて流しに溢れて居

る飯粒めしつぶであるとか、或は魚いさな一切出きりだしたとか、其他の物を食たべして命脈めいみやくを繋つないで居ゐるのだから、どうしても彼等かれらは食物しょくぶつを取る場所ばしょとして毎時まいじも炊事場すじばを襲撃しゅうげきするのである。それは日本橋區ほんばしとか京橋區きやうばしとか繁華はんわな土地とちで家いえと家いえとが密接みつせつして居ゐる處ところでは、一軒けんの家うちで炊事場すじばに注意ちゆういをした所ところで、隣家りんかの臺所たいどころから食事しょくじを取とつてさうして矢張り天井てんじやう上あがつて生存せいぞんして居ゐると云ふこともあらうけれども、マア山の手邊てへんの庭園ていえんでも廣ひろい一戸建いっこだての家いえであると、彼等かれらも隣家りんか迄行いつて食事しょくじを取とると云ふことも非常に臆おそ却うであるから、其一軒けんの家いえの炊事場すじばを襲撃しゅうげきするであらうから、さう云ふ處ところでは炊事場すじばと他たとの通行つうこうを堅固けんこにして所謂兵糧攻めへいりやうこうめにしたならば彼等かれらも大いに弱よわに違ちがひなからう。抑おさも炊事場すじばと云ふものは吾人われんが命脈めいみやくを保たもつ爲ために食事しょくじを取とる上に最も大切たいせつな場所ばしょであるから、之これに向むかつて充分じゅうぶんに金かねを投なじて完全くわんぜんを期きすると云ふ頭あたまを建築主けんちくしゆは持もたにやならぬ然しかるに多おほくの家の建築けんちくの仕方しかたを見ると、建築費用けんちくひよう

の殆たんとど三分さんぶんの二に以上いじやうは客間きやくまや床とこの間ま玄關等げんくわんとうに掛かけて病毒びやくどくの種たね蒔まきをする所ところの雪隠せついんだとか、又今またお話はなして大病たいびやうな炊事場すじばと云ふやうな處ところには建築費けんちくひの三分さんぶんの一いちも掛かけて居ゐらぬ、大體たいたいから言いふと極きく粗漏そろうにしてある、殊ことに貸家かしか杯ばいに在あつては一般いぱんにさう極きまつて居ゐると言いつても宜よろい、地方ちほうの方は又違またちがふけれども東京とうきやうに於おては住民ぢゆうみんの十中じうちゆうの七迄ななは貸家かしか住居ぢゆうである、其その貸家かしかの便所べんじよとか炊事場すじばとか云ふものは、極めて粗漏そろうに出來きて居ゐる。尤もつとも近來きんらいは衛生ゑいせいの點てんから御注意ごちゆういになる爲ために、昔むかしの建築けんちくとは違ちがつて便所べんじよだけは三和土さんわどにするとか或あるはコルタを布しくとか云ふやうになつて洵まことに結構けつこうな話はなしであるが、炊事場すじばの方はまだ警察けいさつの御注意ごちゆういも無なければ制裁せいざいも無いので勝手次第かたてしだいな構造かうぞうになつて居ゐる。私は決けつして日本にほんの臺所たいどころが悪いと言いふのでは無い。昔むかしから働はたらきいゝやうに出來きて居ゐるのだけれども、唯ただ鼠ねづみが出入でいりすると云ふ點てんに付つて注意ちゆういが拂はらつてない、それだから鼠ねづみが自由自在じゆうじざいに臺所たいどころに出沒しゅつぱつすると云ふ譯わけで

ある。で日本の都會たる大阪とか神戸とか横濱とか云ふやうな處に、野蠻病のペストが年々發生して其跡を絶たぬと云ふのは随分西洋文明國に對しても耻入つた話ではあるまいか、既に戰捷の餘威を荷んで世界強國の仲間入りをした我が日本帝國に於て、斯かる野蠻病が其跡を絶たぬと云ふ事に付ては餘程考へにやならぬと思ふ。それで先づ炊事場に付ても便所と同じやうに當局者が注意して下さると、ペスト媒介者たる鼠族の繁殖を防ぐに偉大なる効が有りはしないかと私は考へて居る、この炊事場と云ふものは日本の風として又働さい、と云ふので何處でも板を張る、其板が新しい内は鼠が板を破つて上ると云ふことも無いけれども板の下は自由自在に出入をして居る。家に依ては物置場が不足と云ふ所から炭薪の類を板の下に入れると云ふのが一般の習慣であるけれども或る場合には漬物を入れて置くと云ふやうな事がある、それは成る程漬物に鼠がかゝると云ふことは無い

であらうけれども、彼等は無遠慮に不潔な足で上つたり下りたりして漬物の甕を汚して了ふと云ふやうなことがある、無論甕に泥も着いて居つたらば注意をするかも知れんが、さうで無く唯だ目に見えぬ所の微菌でも附着して居るのだと到底注意が届かない、それもペストの流行時には各自注意もするであらうけれども、平時には却々そこで毒意が届くものではない。斯う云ふ徑よりして病毒を人身に傳播すると云ふことが統計を取つては見ないけれども随分あるだらうと思はれる、それ故に炊事場の下の方は三和土にして、さうして四方は煉瓦を積むなり石で以て圍ふなりそれは各自の都合に任せても宜い。若しそれが六ヶしければ安くて精巧に出来る所の鐵葉を張つても宜い、尙ほ流し下から下水に出る所の口に網でも張つて置く、斯う云ふ事にして置けば鼠の往來する餘地は無い譯である。鼠と云ふものはどうして穴を開けるものか五寸や三寸位の泥は、イクラ挾つて外か

ら這入ッて來ると云ふやうな鋭敏なものだから、
 一間宛位の間隔を取ッて丸石を据えて其上に根太
 を置いとく位の事では、外からでも庭からでも自
 由自在に這入ッて來る、今のやうな家屋の構造法
 に依ては到底鼠を防ぐことが出来ぬ、どうしても
 臺所だけは周圍を煉瓦なり石なりで圍ッて下を三
 和土にする必要があると思ふ。さう云ふ事にした
 所で大概臺所の區域と云ふものは極ッて居るもの
 だから大して費用も要さぬであらうが、已むを得
 ぬければ鐵葉で張るか板で圍ふのだが、其板も日
 本で一番能ふ使ふ三分板とか四分板扱では直ぐと
 彼等が破ッて了ふから、一寸板にするとか、又鐵
 葉でも五寸以上一尺位地下迄埋めなければ可けな
 い先づどツちかと云ふと下を三和土にして周圍を
 煉瓦又は石にすると云ふことが好ましいのである
 木杯である一自然々々に水を吸收するので時を經
 るに隨ッて腐る腐れば自から病毒の繁殖する餘地
 を與へる譯になる、又妙なもので一たび拵へて了

ふと容易に之を仕換へると云ふことは手臆却なも
 のであるから、初めに思切ッて煉瓦なり石なりで
 圍ッて下を三和土にして置けば、随分堅牢なもの
 であッて家屋の生命と左程變らずに永く持堪へる
 ことが出来るから却て得策であると思ふ。臺所と
 便所と一緒に言ふのは可笑しいやうだが、一は不
 潔物を排泄する處、一は人生に大切な食事を供給
 する處だけれども、多く病毒はこの二ヶ處から傳
 播するものであるからして家屋建築主は意を茲に
 致して充分に重きを置くことにせねばなるまいと
 思ふ。便所の方は前に言ふたやうに今日は大分善
 くなつたけれども、臺所の方は中には私が話した
 やうに注意して居る人もあるけれども、之が一般
 には行はれて居ないと斷言して宜いのである。
 諸君御承知の通り鼠と云ふものは臺所に行ッて何
 も飲食物が無いと云ふと地面に溢れた汁までも嘗
 めて命脈を保ッて居るものであるが、時に依ると
 石鹼のやうな物が置いてあるとそれ迄曳いて行く

或は玉子杯を持つて了ふ吾々も新しい石鹼せきけんと曳ひか
 れた實驗じつけんがあるが、チヨット考へると彼等かれらの智慧
 では玉子杯たまごばいを壊こわさずに持つて行くことは出来ぬか
 のやうに思はれるけれども、彼等かれらは却てうまい事
 をやるものである。或る記録杯きろくばいを見ると、玉子の
 如きは一定の鼠ねづみが兩足で抱付いて尻尾を曲げて自
 分の口へ尾の先さを咬へて居ると、他の鼠ねづみがその
 鼠の首筋を咬へて運ぶのだと云ふ事が書いてある
 矢張り丸石鹼まるせきけんを運ぶのも其手段そのしゆだんと同一轍てつであらう
 かと思はれる。彼れはさう云ふやうな機敏きびんな働はたらき
 を爲して居る又人の名前は忘れましたが、或る人
 の話はなしに據つて見ると、狡猾こうかくな鼠ねづみは人が寝て居るや
 否やを試験しけんする爲めに板戸いたどなどを尾で叩いて見て
 それから人が寢静ねしずまつたと云ふことを見定めて徐
 々と臺所だいどころや室内しつないの食品しょくひんの在る處ところを窺うかがふことをする
 と云ふ話である、それ程に奸策かんさくに長けて居る厄介やくかい
 な動物どうぶつである併ながら之を驅除くわじょすることは左迄六
 ケ敷くはあゝまいと思ふ。彼の顯微鏡けんびきやうの力ちからに依ら

なければ見えぬ所の云微有機體いんぎたいを防禦ぼうぎよすると云ふ
 ことは實際じつさい出来ぬ話だらうけれども、鼠ねづみの如き動
 物を驅除くわじょする方法はうほうは少し心懸けたならば賭易たみやすい話
 であらう、即ち前に私が述べたやうな方法はうほうにすれ
 ば慥たしかに鼠ねづみを驅除くわじょするに効かうが有ると信ずる。尤も併
 し人家じんか稠密ちゆうみつして居つて隣家の臺所だいどころも壁一重かべと云ふ
 やうな處ところに在つては、自分の家の臺所だいどころだけ充分注
 意いをしても、隣家の臺所だいどころが不完全ふくわんぜんであつた時には
 鼠の奴ねづみやつは隣家の臺所だいどころで腹はらを肥こしてさうして自分の
 家の天井裏てんじやうらで惡戯あくぎをして居ると云ふやうな譯わけであ
 るから、どうしても隣傍りんぱう相聞あいだけつ結むすして鼠ねづみを驅除くわじょする
 と云ふ方法はうほうを執とらなければ効かうを奏そうせぬものである
 それで今日こんにち便所べんそが改良かくりやうされたと同じことに、炊事
 場かひやうの方も公衆衛生こうしゆせいせい上御上の制裁せいさくが必要ひつやうである、是
 非ひとも御上の力を藉からなければ一般いぱんに之を實行じつぎやうす
 ることは困難くわんなんだらうと思はれるから。どうか當路たうろ
 者ものにも一つ御熟考ごじゆかうを願ねがひたいのであります。此外
 申上げた事も澤山たくさんあります但し餘り長くなつて諸

君が御退屈なさると可かせぬから今晚は是位で置きまして、後日復た私の氣付いた所を御注意申上げることに致しませう。……………

▲いろいろの人

世界は廣し。人種は多し世の中には随分奇妙な事がある。オウスタリアの或所では色の成るべく黒い方が美人としてあるので。炭團に目鼻のお黒さんが大に持囃されるさうだ。これに就て面白い話がある。先年英國人が其土地へ行つた處が土人の女共は其顔の白いのを見てお化粧が來たといつて逃げ出した▲また南洋の或島では鼻の低い程好いとしてある。子供が生れると直ぐに親が其の鼻を押つぶして低くするのだから土人が西洋人を見て。可哀想にあの人は小さい中にお母さんの育て方が悪かつたからアんなに鼻が高いのだと云つて大さう氣の毒がつたといふ事である。ドチラか可哀想だか知れたものか△モウ一つはお唇の大きいのを好む亞弗利加の南の方のホツテントツトといふ人種だ。ここでは子供の頃から成るべくお唇を大きくするやうに氣をつける。だから大人になるとお唇が後ろへ棚の様に突き出して子供が其の上に乗つて遊ぶ程ださうだ

近視眼の衛生

新免義男

近視眼は俗に近眼で眼鏡の力に依らなければよく遠方を明亮に視ることの出來ぬを誰も承知のとすか、今より十數年前よりだん／＼近視眼者の數が増加いたしましたして眼醫者と近視者は種々其療法や豫防に心配して居ますが世間の一般の學生等は近視者は勉強家の證據で名譽のよふに考へ上流社會殊に學者先生達の近視家が燦爛たる金縁眼鏡を用ゆるとの漸く多くなるにつれ一種の流行を來し男女の學生は勿論其他の健眼者迄が裝飾として金縁眼鏡をかけ得心がり、高襟連の異名中に數へ込まれて居る状態でしかも眞面目に近視眼の衛生豫防法を實行するのかと思へば左様で無く「トラホーム」は世間眞面目に其療法や豫防法を研究して随分心配いたして居るに近視眼の方は却々反對で近視者の眞似を健眼者がいたしますは畢竟